豪商の館「機那サフラン酒本舗」の保全と地域活性化活動

特定非営利活動法人
醸造の町摂田屋町おこしの会

特定非営利活動法人 醸造の町摂田屋町おこしの会
設立年月……平成17年8月
法人化した年月……平成18年1月
メンバー数……会員30人
代表者名……渡邉　誠介（わたなべ・せいすけ）
〒940-1105新潟県長岡市摂田屋4丁目8番12
電話　0258-35-3000　　FAX　0258-36-1107
メールアドレス　settaya@yosinogawa.co.jp
ホームページ　http://kina-saffron.com/
facebookページ
https://www.facebook.com/#!/nnn.settaya
＜団体のミッション＞
私達は、個性豊かで創造的な活力のある地域社会づくりに寄与することを目的とし、長岡市摂田屋地域を中心とした構成員相互の協力と資源の相互活用を通じて、町づくりや地域おこしの事業を行っています。

団体設立経緯

地域に生活する者にとっては当たり前の空間なのですが、外から来た人にとって摂田屋はとても魅力的です。平成15年、当時のJR長岡駅駅長の助言もあり、これを有効活用してまちおこしをしようという機運が徐々に盛り上ってきました。ところが平成16(2004)年、新潟県中越地震が起き、この地域にも大きな被害をもたらしました。中でも蔵造りの建物は再生が困難で、費用もかさむため存亡の危機を迎えました。このままではせっかくの景観が無くなってしまう。このままではいけないということで醸造業者を中心にして、地域や摂田屋を愛する市内の有志が集まり、この歴史的建造物や景観を大切にし、有効活用しながら地域を活性化させようとNPO法人の設立に至りました。

地域概要

長岡市南部に位置する摂田屋地区は江戸時代から、酒・味噌・醤油などの醸造業が集積した醸造の町であり、脇往還の一つ旧三国街道が町のほぼ中央を通っています。長岡市の市街地の多くは太平洋戦争で焼失しましたが、摂田屋地区は危うく難を逃れ、明治・大正時代の面影を残す景観が残ります。古くから交通の要衝としても栄え、戦国時代には城が築かれており、酒造りもこの頃から始まったとされています。戊辰戦争の時に長岡藩の本陣がおかれた光福寺もここにあります。明治から昭和にかけ薬酒で一世を風靡した機那サフラン酒本舗が、鰻絵の蔵に代表される異彩を放つ個性的な建物を建造しました。現在、7件の建造物が有形登録文化財に指定されており、歴史的建造物と景観で散策を楽しむ人が増加しています。

活動に至った理由や背景

地域の中核的建物「機那サフラン酒本舗」は、主屋・離れ座敷・庭園が建設から100年以上が経過し荒廃が進んでいます。保存や活用のために残された時間はあまりありません。しかし修復するには巨額の費用がかかり、待っているだけでは貴重な文化財は無くなってしまいます。私達は未だあまり知られてはいない、とても魅力的な稀代の文化財を守るために、できることからということで草取りから始めました。朽ちる速度を可能な限り遅らせる処置を行い、可視範囲をできるだけ広げ、大勢の方にご覧いただけたら、おのずと保存すべきものか否かは判断していただけると思っています。

活動内容と成果

春の訪れと共に私達の活動を再開しました。4月18日の本舗一般公開に向けて、機那サフラン酒本舗の大清掃。囲い外しや雪で折れた大枝の始末などの力仕事や、庭園と屋敷内の清掃に小学生から年配の方までこの日は総勢61名が協力して本舗の清掃を行ないました。他にも6月と9月に「抜いたる隊」と名付けた恒例のボランティア清掃を行ない、延べ160名が参加して汗を流しました。

なかなか天候に恵まれませんでしたが、雨の日でもボランティアの欠席はありません。最近ではあらかじめ自分で目標を定めて参加する方もいます。今日は岩山の蔓草を取り除こう、池をきれいにしよう、手摺を磨こう等々。それぞれの思いを込め、宝物を蘇らせる日を心待ちにしています。

思いがけない大発見もあります。ごみの中から山本五十六や三波春夫の手紙が出てきたのには、みんなびっくりでした。作業は大変ですが、その後は摂田屋の味噌汁やお酒を飲みながら、楽しい歓談のひと時を過ごします。

5月には離れ座敷にトイレと流しが完成しました。イベントや公開をするためにはどうしても必要です。離れ座敷には元々とても立派な便所と手洗いがありますが、下水はおろか浄化槽も無く使えませんでした。ここにトイレを作るためにはまず下水を引かなければなりません。敷地が広い為下水管の総延長は140mにもなります。更に建物全体に意匠が施されているため、設置する場所を見つけるのは困難と思われましたが、階段下に押入れがあり、この場所が唯一建物を傷つけない場所と判断し、トイレを作りました。流し場にあった痛んで使えない大理石の流しを取り外し、ステンレス製のシンクと取り換えました。勿論大理石の流しは別の場所に保管してあります。

今回どうしてもやりたかったのは「土日休日公開」。今まで庭園や離れ座敷を見ることができるのは、イベントの日だけでした。そこで、仕事や授業が休みの日に当番を決めてお客様を迎え入れることにしました。これを可能にするには、スタッフがお客様を迎え入れるスペースが必要ですが、適当な場所がありません。そこで5月の連休を利用して日曜大工で作りました。

主屋正面玄関はごみやガラクタに埋もれている上、鰻絵蔵とはトタン板で区切られていました。ここを片付け、トタン板の遮蔽を外して、7坪位の空間を作りました。ここに、中古のダイニングセットと、業者から寄付してもらったイスを置き、蔵の奥から使えそうな家具を持ち運んで少しずつ休憩室を整えてゆきました。

このスペースはお客様を迎え入れ、本舗をご案内する起点となり、お客様との交流の場となりました。また、それまで鰻絵の蔵入口の恵比寿と大黒の鰻絵の前は、狭くて写真に収めるのは困難でしたが、改装後、ここは記念写真を撮る絶好の場所となりました。5月31日には「住まいとコミュニティづくりNPO　地域交流会」の参加者の皆様をお迎えし、本舗と摂田屋をご案内することもできました。

このスペースはその後も刻々と変化をしてゆきました。冷たいお茶をサービスしたいと思った時、スクラップ屋さんからただ同然の冷蔵庫を運び込みました。日差しが強くなると、入口にすだれを付け、殺風景なトタン板の壁面は展示スペースに変わりました。

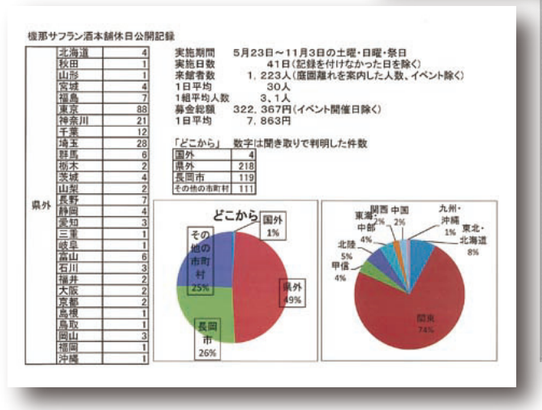
休憩室ができると土曜・日曜・休日の公開をスタートさせました。スタッフはこれまでボランティア経験のある者が2人ペアで担当し、庭園と離れ座敷を説明しながらご案内することにしました。告知は、大勢来られても丁寧なご案内ができないという理由で、マスメディアは使わずfacebookだけにしました。

実施したのは5月23日～11月3日の間に41日間。期間中この公開を利用して、本舗の庭園と離れ座敷をご覧いただいた方は1,223人、一日平均30名です。お客様に「どちらから来ましたか」の聞き取り調査を行ないました。結果は実に29都道府県、県内18市町村と4カ国でした。聞き取りができた範囲での数字ですが、県外218、市内119、市外111、国外4となり、県外の方が半数を占めたのは驚きでした。また、ここを訪れた理由について聞いたところ、「facebookや雑誌で見つけ一度摂田屋に来たかった」という県外の方、「遠来のお客をどこかに案内しようかと迷った時、本舗や摂田屋が頭に浮んだ」という市内の方が多かったようです。

見学された方々は、悲惨な現状に戸惑いながらも、見事な建物や庭園に驚かれた様子でした。保存活動を展開中であるとの説明に、激励や応援の言葉をたくさんいただきました。休日公開で集まった寄付金も32万円に上ります。

また、建築や造園に詳しい方からは、私達が知らなかった本舗の魅力をたくさん教わりました。記録が少なく十分な調査も行なわれていない現状では、お客さまからの情報は貴重です。本舗の姿をきちんと紹介していくことが、保存のために今我々にできる最高の手段であり、この活動はとても有意義だったと思っています。

思いついたことはすぐに実行しました。過去のイベントや講演会、コンサートを動画で紹介したかったので、パソコンでお見せしていましたが、ある時「鰻絵の蔵」の中が空いていることに気づきました。そこで一階に白い化粧ボードでスクリーンを作り、プロジェクターを購入し、不要のアンプやスピーカーを持込み、手作りシアターに改装しました。11月にはこの会場で映画「千年の一滴　だし　しょうゆ」の試写会を行なうことができました。



二階は床がボロボロだったので、カーペットを敷き、備え付けのガラス戸棚を改良し、照明を取付け展示ケースに、壁側にはイーゼルに乗せたパネルを配置し、中央には展示台としてテーブルを置きました。ここに本舗内で見つけた資料や、昔の雑誌、調度品を持込み、ちょっとした展示室になりました。10月に行なった一般開放では大いに活躍し、訪れた方々に楽しんでいただいたと思っています。今後は更に改良を加えて、捫田屋や機那サフラン酒本舗のご案内に活用してゆくつもりです。

10月には本舗の魅力を伝えて保存活用を推し進めるため、シンポジウムを開催しました。タイトルは「機那サフラン酒本舗の魅力を語る」。開催前の1週間、会場のアオーレ長岡の大型ビジョンで本舗の魅力的な映像と共に告知し、当日は会場に約100枚の写真展示を行ないました。シンポジウムの冒頭、長岡市長から行政も積極的に応援する旨の挨拶をいただきました。一部は今回で3回目を迎える建築調査の報告講演、二部はパネルディスカッションで4名のパネリストから建築や時代背景、創業者の人物像、まちづくりのためのキーワード、全国のまちづくりの事例から本舗の可能性と魅力について語ってもらいました。保存活動とまちおこしに新たな進展を予感させるイベントとなりました。

活動に並行してどのようにしたら残せるのか、そしてどのような活用方法が良いのかの勉強会が始まりました。長岡造形大学の水流潤太郎理事長を座長に、私達も参加して6ヶ月を費やして議論が重ねられ、12月には「サフラン酒本舗を捫田屋観光の拠点に」という報告書がまとまりました。

まだまだ乗り越えなければならない問題も多く、先行きは不透明ながら進むべき方向性が示されました。ご近所の住人の一言が発端でボランティア活動が始まり、やがて市民運動に拡大し、最終的に稀代の地方の宝を残すことができました。という結果を夢見て今後も活動を続けます。

今後の予定

庭園の草取りを始めて7年が経とうとしています。動機はこの庭を再び見てもらえるようにしたいから。やがて、その目標は本舗の保存と活用に変わりました。そして昨年、進むべき方向性が捫田屋勉強会報告書にまとめられました。本舗と捫田屋地域に寄せられている声に応えるために町おこし会社を設立し、観光・文化、レストラン、売店、教育研究の事業を、民間の発意と行政の側面支援により実現を図るというものです。

現実には障害が存在し、それは自分たちだけでは解決できないことであるため、実現にはまだ時間がかかることが予想されます。とはいえ、建てられてから100年を経過し、地震のダメージが残る建造物からは悲鳴が聞こえてきます。冬を超え建物の周囲には落下した瓦や漆喰の無残な姿がありました。「これ以上朽ちさせてはいけない！」今年度は屋根の補修を中心に予算を組みたてたところです。

活動によって立ち入れる場所の拡大と公開を繰り返した結果、少しずつ世間に知られるようになってきました。応援してくれる人もずいぶん増えたと実感しています。しかし、目的を遂げる為にはもっともっと支持が必要です。今年も土日休日公開を中心に本舗の魅力や価値を伝える活動を継続します。

もう一つ重要なことは本舗の魅力を克明に調べることかもしれません。実は記録されたものがほとんどありません。何があるのかそしてどのような価値があるのか、どのような物語がここにあったのか、これらを解き明かすことも保存活用を進める上で大きな力になると考えています。私達でできることをひとつひとつ行ない、貴重な文化財の早期決定に向けこれからも活動してまいります。